

#本編

##プロローグ

「やあ、マネージャーくん。元気かい？ ボクは元気だよ」

「……ふふっ。すまない。ちょっとしたジョークさ。悪いね、この忙しい時に」

「うん。あの記事のせいだろう？ 『大河輪たまき、芸能界引退。億単位賠償金を前にメートル級爆乳解禁待ったなし』……」

「まったく、ひどいタイトルだね。メートル級爆乳解禁ってなんだよ。せめて、秘められた肉体を露に……とか、美しい表現をしてほしいな」

「ああ、分かってるよ。ふざけている場合じゃないってね。うん、結論から言おう。あの記事の内容は、真っ赤なウソだ」

「後輩と乱交パーティなど開いていないし、道場での逆セクハラも事実無根。全くのでたらめだね」

「……なんだい？ 大切な相棒のことを、信じていなかったのか？ あの記事の通り、ボクをいやらしい変態だと思っていたのかな？」

「あはは。まったく……あ、でもね。芸能界を引退するのは、本当だよ。はは、ごめんね？」

「…うん。さっき言ったとおり、あの記事の内容は、全部ウソさ。本当は……もっと、ひどい」

「どういうことかって？ それは……すみません。やっぱり…んっぐ…っ！ はい、分かりました…」

「な、なんでもないよ。ところで、キミ、今、事務所かい？ 周りに他の人はいないかい？」

「本当に？ 誰もいない？ セナさんや社長も？ …ありがとう。それじゃ……今から、繋げるね」

##ポコ、と電子音。ビデオ通話が繋がる

##表紙画像

##全裸のたまきがエロ蹲踞で画面いっぱいに大写しになっている。目に涙を浮かべながら必死に笑い、口には『祝★NGナシ奴隷豚デビュー』と描かれたたすきを咥えている。

「や、やあ。ビックリ、したかな？ キミに、こういう姿を見せるのは、はじめてだものね」

「うん。まあ、見ての通りだ。ボクはこれから、春風便器団豚組の大河輪たまきとして、ご迷惑をおかけした方々に、一生をかけてご奉仕することになった」

「だって、ほら。今回の一件で発生した莫大な違約金は、ウチの事務所にはとても払えないだろう？」

「だから、関係者の方々に頭を下げて、ボクだけが負担するようにしてもらった」

「その代わり、ボクは無期限で彼らの仕事を請け負うことになった。だから、キミとはこれまでだ。ごめんね」

##驚愕にフリーズするあなた。気まずい空気が流れる。

「あ、ははっ。そうか、うん。そりゃ、絶句もするよね。でも安心してくれ、ボクは……」

「うん？ お前は、本当にたまきなのか、って？ あ、ああ……」

「そっか。信じられない、よね。キミの知っている大河輪たまきは、こんなのじゃなかったもんな」

「特に、この胸。驚いたかな？ 去年から、20cm以上も大きくなったんだよ」

「お腹も、随分薄くなってさ。以前は、ほんの少しだけど、腹筋も割れていたのに。は、はは……」

「…ふう。本当はね、ボクも見せたくはなかったんだ。こんな惨めな体を。全部隠したまま、キミの前から消えたかった」

「だけれど、社長に……んっ。ご、ご主人様に、説得されてね。最後の挨拶ぐらい、顔を見せなさい、と」

「本当に。本当に、イヤ、だったんだけどね。しつこく、ねちっこく、何度も言い聞かされて……ボクは、耐えられず……」

「ふーっ。まあ、せっかくの機会を頂いたんだ。どうせなら、キミにすべてを知っておいてもらおうかと思ってね」

「ボクはこのまま、数々の汚名を着せられて、表舞台から消えることになる。そのことに悔いはないよ。自分で選んだ結末だ」

「でも、同時に……誰かに。たったひとりだけでいい。本当のことを知っておいてほしいと思うんだ。ずっと一緒に、かけがえのない仲間だった、キミに」

「観客はキミひとりでいい。だから……聞いてくれ。これが大河輪たまき、最後のステージだ。最期まで……付き合ってくれよ」

##一章 カタに嵌める ～信念と誠意の罭～

「さて……とは言っても、なにから話そうかな。いろんなことをされたから、どれから説明すればいいのか、分からないな」

「……うん？ あ…ゴメンね。こんな汚い体、見たくないよね。でも、服を着せてほしいなんてお願いしたら、なにをされるか分からないだろう？」

「殴られるかもしれない。犯されるかも。もっと、ひっ、酷いことを……さ、される、かも…(ガチガチ)」

「はっ、はっ、は一つ…す、すまない。少し、取り乱したね。見苦しいところを……え？」

「殴られたら、やり返せば……なッ、キミはなんてことを……！ ちっ、ちがッ、ちがいますッ！」

「今のは彼が勝手に言っただけです！ ボクにそのような意思はありません！ どうかお許しを！ お許ください！」

「はっ、はっ、はあっ……！ に、二度と…二度と言わないでくれ！ まるで、ボクが、本気を出せば男の人になんて勝てるような言い草を……！」

「ああ、そうか。キミは、知らないのか。なら、そこから……(覚悟を決めて息を整える)」

「『仮面ファイター・プリンス』。ボクたちの最初の、そして、最高の作品だったね」

「女性として初のファイター役。しかも、デビュー作にして主演だった。オーディションに合格した日のことは、今でも思い出せるよ」

「ね。覚えてるかい？ 初日の殺陣で、緊張し過ぎて本当に当てちゃったのを。スタントさんが気絶してしまったから、キミが代わりに演じることになってさ」

「ははっ。ずっと二人で稽古をしていたから、息がピッタリで監督も驚いてたよね。あれから何度もその道に誘われていたっけ」

「……そう。ことの発端は、スタントの稽古だった」

「あの道場だよ。初代ファイターを演じた偉大なる先輩……彼の薫陶を受けて作られた、歴代のファイター俳優が、実践的な武道を学ぶ道場」

「そう、いわゆるガチ稽古だね。撮影後によく通っていただろう？ はじめて招待された時は胸が踊ったな。でも……」

『……シャツや下着も、ダメなんですか？ いえ、申し訳ありません。こういった伝統に疎いもので』

「……はは。当然、映像もありますよね。はじめから、ボクを嵌める気だったんだから」

「稽古初日のことだ。下着もシャツも脱いで……裸の上に胴着を着るように命じられた」

#衣擦れの音

「おかしいとは、思ったさ。でも、郷に入っては郷に従えだ」

『……着替えました。大河輪たまきです。本日は、よろしくお願いします』

「みんな、露骨な目で胸の谷間を見てきてね。正直……失望したよ」

「立場の弱い女優を性的に消費する。芸能界ではよくあることだけど……まさか、ファイターを鍛える道場で、こんなことが行われているなんて」

「稽古の相手も、いやらしい目でボクのカラダを舐め回すように見てきたよ。組み合った瞬間、抱きつくみたいに密着してきて……」

「……あのまま、普通に投げられておけばよかったんだ。でも、あの男は……ボクの胸元に手を突っ込んで……」

「一度だけ、見逃した。事故かもしれないから。だけど、そのまま胸を揉んできたから、だから、ボクは……」

『はあッ！』

#男が投げ飛ばされる音

「ああ、ボクは……ボクは、なんて、浅はかな……っ」

『……今のはセクハラです。言い訳はできませんよ』

「こんなこと、言わなければ……へらへらと笑って、誤魔化しておけば……」

『いいえ、黙りません。ここでボクが口をつぐめば、この道場はずっと変わらない』

『これから、ボクの後に何人もの女性ファイターが生まれるでしょう。大切な後輩たちの為にも、ボクは泣き寝入りなんてしない！』

「……ボクは、間違えた。こんなこと、こんなことさえ、しなければ、ボクは……」

「(息を吸い込む)……その日の稽古は、終了になった。投げた相手が、失神してしまっただけ」

「次の日、朝稽古をしようと事務所に行った時、分厚い封筒が届いていた。差出人は例の男が所属するJAIの労働組合。嫌な予感がした」

「中身を見て、青ざめたよ。彼が意識不明の重体だと書いてあった。診断書の写しも同封されていた」

「それを見て、ボクは真っ先に道場へと向かった。とにかく謝らなければ、そんな思い出、頭がいっぱいだった」

「ほら、誠実、正直、全力、が音楽学校のモットーだっただろ？ 先生にもよく言われていたからさ。真心を込めた行動は、必ず相手に伝わるって」

「……世間知らず、だったよ。嵌められたと気付いたのは、道場で男たちに取り囲まれてからだっ
た」

『……意識不明という話は、ウソだったんですね』

「彼は、ピンピンしていたよ。大勢の仲間と一緒に、ニヤニヤ笑っていて……」

『ボクを呼び出して、どうするつもりですか。まさか、また昨日のように……んあッ！？』

「油断したよ。いきなり後ろから羽交い締めになされてね。まさか、ここまで直接的な手段に……暴力に訴えてくるとは、思わなかった」

『なッ、なんの真似だ……ッ！ 離してください！ こんな暴挙、許されるはずが……おッ
ごッ！？』

「思い切りお腹を殴られて……ようやく、理解した。彼らが、本気で、ボクを潰そうとしていると……
」

『おッ、おッ……！ こ、こんな、こんなことを……うッ！ おッ！ おッおッ……』

『げほッ、ごほッ……！ さ、最低だ……抵抗できない相手を、一方的に……ぐっほおッ！ うっ
ぐウ！ ンおッ！ おううッ！』

「……ああいうリンチでは、とにかくお腹を狙うらしいね。顔に痣ができると、バレるから」

「ボクも、腹筋には自信があったけれど……ああも一方的に殴られ続けると、流石に、キツイね
……」

『うおッ、おッおッ……うッ、うう……は、はな、せエ……うぐウッ……』

「散々にお腹を殴られて、立つこともままならなくなった後……ヤツが、襲いかかってきた。昨日ボクにセクハラをした、アイツが……ッ」

『はアッ、はアッ、いッ……あッ、あなたたちに、武道家としての、誇りは、ないのか……卑怯な手
ばかりッ、うあッ』

##投げられる音

『あッ、ああッ……』

「受け身も取れないような、危険な投げ技を食らって……動けなかった。そして……」

『は一ッ、は一ッ、う、ぐウ……ッ』

「ヤツがのしかかった時、わかった。寝技では、ないと。無理矢理うつ伏せにされて、乱暴に下を脱がされ、て……」

『あッ、はーッ！ はーッ！ やめろッ、やめろオーッ！』

「力の限り、抵抗、したんだけどね……また、大勢に、押さえつけられてしまって……」

『やめッ、ぐッ、いゝぎいいいッ………！』

「……レイプだ。ボクは、レイプされた。大勢の前で、暴力的に押し倒されて。同意のない、性行為を……」

##ピストン音

『うっぐッ、ふッ……！ ふぐッ、うッ、んんん……ッ！ んッ、んんんん……ッ！』

「い、言い訳、じゃないが……ナカに異物が入ったまま、抵抗するの、難しいんだ。だから、ボク、されるが、ままで……」

「ど、どれだけ鍛えても、マンコは閉じれないんだなって。バカにされながら、何度も、何度も、突かれて」

『ふッ、ぐッ……！ うッ、うううッ！ んっぐッ、ぐッ、ううう……ッ！』

「締まりがどうの、尻の弾力がどうの、と……まるで、人のカラダを性処理用の、道具みたいに……！」

『ゆッ、ゆるさない……ッ！ うッ！ かッ、必ず、償わせて……えッ、あッ、待っ……んんんんん……ッ！？』

「さ、最後に、ヤツは、ボクのナカに直接射精した。オナホだとか、なんとか言って。ボク、もう、頭が真っ白になって」

『あ、あああ……ッ！ あ、あなたは、絶対に、許さな……ッ、あッ、が……ッ！』

「……ここまでだ。絞め落とされたボクの記憶は、ここで、途切れた……」

「次に目を覚ました時、ボクは全裸だった。スマホも服も取り上げられて……逃げ出せない状態で、ボクはアレを見せられた」

「行為中の写真さ。ボクが気絶しているのをいいことに、まるで、同意のある性行為を行っているような写真を撮られてしまった」

『ふ、ふざけるな！ そんな写真が、証拠になるとでも……！？』

「うん。キミの言う通りだ。だけど、一度でも写真付きで記事を出されれば……それがウソだと証明するには、相当な時間が掛かってしまうだろう」

「その間に公開される作品への影響は避けられない。特に、劇場版・仮面ファイタープリンスへの影響は」

「あの作品には、ウチの事務所も少くない出資をしていただろう？ それで、公開延期……最悪、中止にでもなれば……」

『仮面ファイターの為の道場が、作品を人質に取るとは……あなたたちは、腐り果てている……！』

「それに。それに、なにより……この件について訴えれば、キミが、キミたちが道場の連中と直接対峙することになる」

「それが、なにより恐ろしかった。彼らの悪質性や暴力性を、まざまざと見せられたから……」

「こんな連中を、キミたちに近づける訳にはいかない、そう思うと……」

『ボ、ボクがお前たちの言うことを聞けば、この件は内密に済ませてくれるんだな……？』

「だから、ボクは、あんなことを……」

「すまない……！ ボクは愚かで、思い上がっていたんだ。キミたちを守っているつもりだった……！」

「弱い女のくせに。守られる側の、存在の癖に……」

『……わかった。好きにするといい。だが……全てがあなたたちの思い通りになると思ったら、大間違いだ。この報いは、必ず受けてもらうよ』

「記事の隠蔽と引き換えに、ボクは、二つの契約を結んだ。ひとつは、道場における無期限の奉仕活動への従事。もう一つは、JAI提携事業者への一部業務の委託」

「ボクは、この契約書にサインしたことで、逃げ道を失った。身も心も奴隷に堕ちるまで、ひたすらいたぶられる日々が、始まったんだ……」

##第二章 女の分際 ～仮面ファイター——デカ乳サンドバッグオナホ～

「あ、あの、ご主人様。姿勢を変えても、よろしいでしょうか？ この姿勢、辛くて……ああうう……っ♥」

「……はい。承知して、おります。ですが……んあっ♥ わ、わかりましたっ♥ もう言いません。口答え、しませんから……」

「は一つ、は一つ♥ うん？ ご主人様の、名前……？ 言うわけ、ないだろう。それを知れば、キミの身だって……だめだッ！」

「いいかい……！ 決して、その名前をだしてはいけない。もしもご主人様の機嫌を損ねれば、芸能界のみならず、日本で生きていくことすら……」

「なんのために、ボクがこんなことをしているのか……頼むから、その意味をよく考えてくれ……」

「さて……どこまで、話したかな。ああ、最初の契約を結ばされたところか」

「契約は、明らかに違法なものだったよ。奴隷のような働きを強要する内容だった。だが、写真を抑えられている以上は、従うしかない」

「劇場版が無事に公開するまで……それまでの辛抱だと言い聞かせて、ボクは道場に通うことになった。稽古のアシスタントを努めるために」

『し、白帯、大河輪たまき……！ ご迷惑をおかけしたお詫びとして、稽古のお手伝いをさせていただきます。 ご指導のほど、よろしくお願いします……！』

「ボクの扱いはひどいものだった。下着の着用は当然禁止。その上、大勢の目の前で胴着に着替えさせられた」

『ふーっ、ふーっ……♥ き、着替え終わりました……よろしく、お願いします……っ』

「そして……稽古とは名ばかりの、リンチが始まった」

『はーっ、はーっ……！ ふっ……！ くふっ！？ うーっ、ふーっ……！ この……ふっぐっ！』

「ボクから技をかけるのは、禁止にされた。つまりボクは……体(てい)のいい、サンドバッグにされたのさ」

『んっ、うっ……んんぐっ！ ふ、ふん……この程度……おつごっ……！？ あがア……ッ！？』

「柔道の稽古なのに、わき腹を殴られたり、お尻を蹴られたり……やりたい放題にされてね」

「別に、あの程度の痛み、大したことはなかったよ。本当に辛かったのは……」

『んっ、くうっ…… は～～っ、は～～っ……な、なんでもない、です……っ、ふ、うう……っ』

「先輩方は、ことあるごとに胸やお尻を触った。つい反撃したくなるのを必死で抑えたよ」

「やり返さないように、体捌きだけで巧妙に避けて……それも、長くは続けられなかった」

『は～～っ、は～～っ……い、いつまで、続け……うっぐっ！ んんん……ふうう……ッ！』

「30分も稽古が続くと、ボク、もうヘトヘトで。息つく間もなく、技をかけられ、セクハラをされて……そんなだから、簡単に投げられてしまうんだ」

『うああッ……！』

#畳に投げつけられる音

「普通はこれで一本。稽古が一旦終了だ。でも...終わらない。先輩が満足するまで。ボクが、心から泣きを入れるまで」

『んっぐッ……！ ふウッ、んうッ……！ や、め……んっ、ぐうう～～～……』

「キミも知ってるよね、絞められる苦しみを。でもね、女の体で絞め技を掛けられると、本当に、地獄だよ」

『うゝああッ、かつ、はアッ……あッ、ああッ……！』

「圧倒的な体重差で、全身の骨が軋むんだ。それだけで呼吸が苦しいのに、さらに襟首を締め付けられて……」

「シゴキに慣れてる先輩達は、簡単に落としてくれなかった。ボクの意識をギリギリ残しながら……こう囁くんだよ」

『『こんなに弱いファイターは、はじめてだ』って』

『うッ……！？ ううう～～～～～～～～～ッ……』

『『女ファイターなんて誰にも認められてない』とか。『こんなザマでファンの子供にどう言い訳するんだ』とか。好き勝手に、ボクをなじるんだ』

「それだけじゃない。乱暴に胸を揉みながら「このデカイ乳でプロデューサーたぶらかしたんだろ」って。ボク…耐えられなくてさ。抵抗、しようとしたら……」

『こ、このオ……！ うぐッ……！ んッ、んんんう～～～～……ッ！』

「そしたら『契約違反だぞ。どうなるか分かってんのか』って……卑怯だ。あいつら、卑怯なんだよ。でもボク、耐えるしかないから……」

『がッ、ぐッ……！？ ん、んん……ッ、ま、まいっ……あッ……！？ がッ、あッ……』

「あまりにも苦しくて、何度も降参しようとした。でも、参った、って言わせてくれないんだ。『ファイターなんだから、最後まで諦めないよな』って」

『かつ、ひゅっ……はッ、はッ……んがッ……ぐ、ぐる、じ……ぎッ、いゝ……ッ』

「白目を剥くまで締め上げられて、手足をビクビクばたつかせて。最後までみんなの笑いものにされて……そして、落とされる」

『あッ、がッ……あ、うあ……ッ』

「ボクは……愚かだった。最後まで抵抗するべきだったんだ。意識を失った女が、なにをされるか、知っていたはずなのに……」

『う……んっ』

##ピストン音

「(少し涙ぐむ).....ごめんね。本当に、なにも覚えてないんだ。気付いた頃には、すべてが終わっていて.....」

##ピストンの音だけが響く

「目が覚めた後、また言われたよ。同意があったって。自分から胴着を脱いで、先輩方を誘惑したんだって」

『ん、お。お、おオ.....？ う、うん.....♥ あ、ふ.....っ』

「でも、でも.....そんなのウソだよ。ボクが意識を失っていたから、好き勝手に言ってるだけで」

「キミは、キミだけは信じてくれよ。ボクはそんな女じゃない。ボクは.....」

『んっおッ♥ お`お`おおオ.....ッ♥ きもちいいですッ♥ もっとして、ふお`ッ♥ ん`ん`ほおお.....ッ♥』

「(辛そうな吐息)」

『これは.....えと、その.....は、はは。あの、ちょっと。ちょっと、待ってね』

「あ、あの.....別の記録がありますよね。ボク、途中で気がついて、凄く抵抗したじゃないですか。それを.....お`ッ♥♥」

「お、おお.....お願い、します。全て伝えろと言ったのはご主人様じゃないですか。だから.....ふうぐッ♥ ううう.....ッ」

「今さら、訴訟なんて.....ボクはただ、マネージャーくんを知ってほしい、だけで.....くおおッ♥♥」

「ほんとっ、ほんとにつ、それだけなんですっ、信じてくださいっ！ ボクは.....お`おおおッ♥♥」

「ボクは、マネージャーくんを.....ッ♥ お`ッ♥ 愛して、いたッ！ 最後まで、彼のためにッ、ぐおお`ッ♥ ふお`ッ、おおおお————ッ♥♥♥」

##ぶしッ、と潮噴き

「お`ッ、お`オッ♥ も、申し訳ありません.....♥ け、契約に則って、清掃作業を、させていただきます.....」

「ま、マネージャーくん.....ちょっとだけ、目を、閉じて.....」

##5秒ほど床を舐める。その後土下座

「お、終わりました.....この度は、大変失礼いたしました.....んっ」

「はい、はい。爆乳ポルノ便所の分際で、思い上がった口を叩き、本当に申し訳ありませんでした。どのような罰も、謹んでお受けいたします」

「ただ、ただ……ぐうッ……！ はい……承知、いたしました……」

#元の姿勢に戻る

「待たせたね、マネージャーくん。少し粗相をしてしまい、ご主人様に怒られてしまった。申し訳ない限りだよ」

「でも、おかげで、本当のことを話してもいい、と許しを得たよ。寛大な措置に、感謝しなくちゃね」

「そうだ。いい機会だから、説明しておこうか」

「今、ボクの傍にはご主人様が座っておられる。その隣では、ボクの専属調教師が目を光らせている」

「ご主人様の意に添わないことがあれば、彼女はボクのオマンコをぐちゃぐちゃにする」

「うん？ ああ、オマンコなんて、下品な言葉にビックリしたかい？ すまないね。だけれど、そう呼ばないとお仕置きされてしまうんだ」

「この通話も、はじめは断ったんだよ？ でも、その時に、奥の奥まで抉られてしまって。そのせいで、未だにオマンコが閉じないんだ。ずっとお汁が垂れ続けて……っ♥」

「元々は、こんなにだらしなくなかったんだけどね。あの日から、毎日のようにイジメられて、おかしくなっちゃったんだ」

『は一つ♥ は一つ♥』

「……何度もレイプされて、ボクはより真剣に稽古に臨むようになった。意識を失えば、なにをされるか、骨身に染みて分かったから」

「でも……無意味だった」

『う、ううう……あぐッ！ は一ツ、は一ツ……！ まだっ、まだまだあ……』

「ボロ雑巾にされるまで、何時間でも稽古は続いた。道場には常に大勢の人がいたから。一人の猛攻をやり過ごしても、すぐに別の相手が……」

『はあ～～っ……はあ～～っ……ボクは……もう、二度と……うおお……！』

「心が折れそうになった時は、キミのことを思い出した。キミがボクをどれほど想ってくれているか、何度も自分に言い聞かせた」

「……そんなボクを、先輩達はあらゆる手段を使っていたぶったんだ」

『がはッ……！ そ、そんなっ、卑怯なっ、あああッ！』

「相手と必死に組み合っていると、突如として背後から襲われた。二人がかりでボクを落とそうというんだ」

「卑怯だって言う『ファイターが情けないこと言うなよ』って。それで、両腕を簡単に掴まれて、抵抗できなくされて……」

『ぐあッ、んんあッ！ せ、背中折れるッ、ぐッ、ぎゃあああッ……』

「そこからは、ただのリンチさ。帯で首を絞められながら、お腹に膝蹴りを何度も叩き込まれて……」

『おっごッ！ うおッ！ あッぐ、ぎっひひひひひ……ッ！』

「大抵の暴行は受けたよ。でも、一番効いたのは……顔へのビンタだった」

『ひぎッ！ 顔はッ、顔はやめてくださ……いいッ！？ ひィ〜〜ッ、ひィ〜〜ッ』

『やめて……やめてくれ……バレるから、バレる、からあ……』

「こんな目に遭ってるの、キミに知られたくないって。そんな思いでいっぱいになって……そしたら、もう、我慢できなくなってるさ」

『すッ、ずみませんでした……ッ！ ゆるして、ゆるして……ええ……ッ！ こうさんッ、こうさんッ……ぐっぎッ……！？』

「この頃には、絞め技されると、ちょっと安心しちゃってさ。あ、もう終わる、気を失えるって」

「……ごめんね。弱い女で。ボク、ファイター失格だね」

##ピストン音

『……おっ。お、んお、おっ。あっ、おっ、ん、お……っ♥』

「毎日、犯されてるとさ。反応、変わるんだって。道場の先輩方が、自慢げに言ってたよ。どエロい喘ぎ声で誘いやがるって」

「多分ね、防衛本能じゃないかな。もうやめてくださいって、本能が降参しているんだよ。もう痛みつけないで、犯して……って」

『ふう、おっ♥ あ、んん……♥ ふう……んんっ♥ ん♥ ふう〜〜……』

「そんな日々が二週間も続いた後……シゴキの内容が、変わり始めた。はじめから、ボクを女として、いたぶるようになったんだ……」

『うくっ、ふあっ……♥ あ……っ、こ、これはちが……っ♥ ああああ……っ♥』

「ち、違うんだよ。毎日レイプされて、ボクの体、おかしくなってさ。だから、乱暴に胸を揉まれたり、オマンコを蹴られたり、するだけで……っ♥」

『いいっぎっ♥ んひっ、ひいひい〜〜〜〜……っ♥』

「ぞ、ゾクゾク、しちゃって……っ♥ 仰け反って、ヘンな声、あげちゃってさ……」

『うふう〜〜……っ♥ うふう〜〜っ……♥』

「そんなボクを、先輩方は面白がって……技を掛けながら、セクハラをするんだ。関節をキメられながら、オマンコをすりすり撫でられて……っ♥」

『ん〜〜〜〜っ♥ ん〜〜〜〜っ♥』

「そのまま、乳首を爪先でぎゅうって潰されたり……お尻が腫れ上がるまで何度も叩かれたり……痛い気持ちいいの区別がつかなくなるまで、ひたすら……」

『うあっ♥ あはぁんっ♥ うっ♥ んんんう……っ♥ あっ、あっ、ああああっ……♥』

「もう、頭がパニックになっちゃってね。道場で、お、お漏らし、することも……」

『ひ〜〜っ…… ひい〜〜〜〜っ……』

「そこで、皆に、笑いものにされて。着替えも許してもらえなくて。ボク、もう恥ずかしくて。なにも考えられなくて……(涙ぐむ)」

「(涙ぐんだまま)そうだ。ボクの心を折るためなら、彼らはなんでもやった。ボクが守りたいものは、全部、穢されていった……」

『ぷ、ぷりんす、きいっく……っ！ んんっ♥ んっ♥ プリンス、ハリケーン……っ♥』

「プリンス・ハリケーン……一緒に、練習したよね。殺陣師の人に、女の子には難しいか、なんて言われて」

「意地になって、深夜まで特訓して。ようやく成功した頃には朝だった。でも、おかげで撮影本番では一度も失敗しなかった。それを……」

『ぷ、ぷり、プリンス……ふっ、うっ♥ うはア、ううう……………っ♥』

「オ、オマンコにさ。ディルドーを……えっと、男の人のアレを……んあっ♥ お、おちんちんの形した機械を、入れられてさ」

「それ、動かしながら、やれって。みんなの前で、まるで、宴会芸みたいに」

『ぷりんすっ、ハリっ、はっ、あああ……っ♥』

「ディルド、動く度に、凄く気持ち良くて。普通に立つこともできないくって……」

『はッ、はッ、はッ……♥ ぷ、ぷり、ぷりんす』

「宙に飛ぶために、強く踏み込んだら、それだけで……」

『お〴おおッ♥♥』

「ぎゅうっ、て。ナカで、ディルドを強く締め付けてしまって……もう、腰、砕けちゃってて……」

『うふううッ♥♥ ふぐッ、んんんん——ッ♥』

「ひくひく仰け反って、気持ちいい時のお汁を噴いて……情けなく、倒れてしまうんだ……」

『おッ♥ お〴おおオ……ッ♥』

「何度も、何度も、失敗する度に立たされて、やらされた……ボクがもう二度と飛べなくなるように、念入りに……」

『おッ、おおッ……♥ で、できません……も、もう許して、ゆるしてください……ッ♥』

「もう、心も体も限界でさ。許してくださいって、何度もお願いしたんだよね」

「でも、そうやって、お尻を突き出していると、思い切りディルドー、蹴られて……また、また、お汁を噴いて……」

『うぎゃッ♥ ぎゃあああッ♥ やめッ、ええうッ♥♥ うぐうう~~~~~ッ♥♥ 』

「ボクが立つまで、何度も蹴られるんだ。その度に、ボク、凄い形相で絶叫して、それを見て、みんなが笑って……」

『うおッ……♥ おッお〴お……ッ♥ はいッ、立ちますッ……♥ かめんふあいたあぷりんすっ♥ い、い、イキますッ……♥ お〴おお……ッ♥』

「もう、蹴られたくないからさ。四つん這いになって、お尻をプリプリさせながらさ、必死に立って、もう一度……」

『う~~ッ♥ ふ~~ッ♥ んん~~ッ♥』

「無理、なんだよね。ただでさえ、何時間もの稽古で限界がきてるのに、お腹の奥まで抉られたら、もう技なんて出せないんだ……」

「そんなボクのお尻を叩いて、先輩方は『稽古サボれば、どうなるか分かってんだろうな』って。でも、ボク、立つことが、精一杯で……だから……」

「ボクは……ボクは……ッ」

『プ、プリンス・デカケツ・ダンス！ デカケツぷりぷり！ デカケツぷりぷり！ オマンコグシヨグシヨ！ オマンコ！ グシヨグシヨ！』

「……うッ、ううッ……これはね。雑魚ファイターのプリンスが、強い男相手に使う、必殺の誘惑攻撃さ」

「大きなお尻とぐしょ濡れのオマンコをアピールして、ボクが弱い女であり、戦いよりも交尾に向いて、いると……(涙ぐむ)」

『つ、次いきますッ！ プリンス・デカパイ・ドラム！ おほ♥ おほおほ♥ おほほほおっ♥』

「こ、これも、誘惑攻撃、だね。大きなドスケベおっぱいを見せびらかして、男を誘うしか能の無い淫売であることを証明、するんだ」

「乳首もガチガチに硬くして、おっぱいを叩いて興奮するマゾだって、あ、アピールを……」

『むおッ♥ 仮面売女プリケツ、参上ッ♥ プリケツ・ハリケーンで、やっつけてやるっ♥ おっほッ♥ おっほッ♥』

「力尽きたボクは、こうやって、先輩方に媚びて、許しを乞うことしか、できなかった……ッ♥」

「ボクは、ボクは……本当に大切なものを守るためなら、ここでどれだけ恥をかいてもいい、と、言い聞かせて……ッ！」

『おほおおおッ♥♥ 強い強い先輩方には、とても敵いませんッ♥ おっぱいぶるんッ♥ ぶるるんッ♥』

『オ、オマンコファイター・プリンスの、オマンコ攻撃ッ♥ えいッ♥ えいッ♥ プリプリッ♥ プリプリーッ♥』

##ちょっと間

「……バカみたい、だね。ここまでしても、結局は奴隷になることでしか、キミを守れなかった」

「あ、いや……すまない。まるで、キミの為にボクがこんな目に遭っているような言い方をしてしまったね」

「ボクがこうなったのは、全て自分の責任だ。だから、キミが負い目を感じる必要は、なにひとつ無い」

「それに…今から思えば、道場でのリンチなどかわいいものだった。あの子が現われてからのことを、思えば……」

##三章 春風便器団豚組 ～尊厳大特価祭～

「……ボクには、専属の調教師がいると言ったね。彼女の役割は二つ。ご主人様に逆らった場合のお仕置き。そして、性奉仕の教育」

「彼女……みこ様は、音楽学校時代の後輩さ。そう。自殺未遂者を出した、あのイジメ事件の主犯だ」

「あの事件の被害者からは、ずっと相談を受けていてね。最悪の事態になる前に、なんとかイジメは止めたのだが……」

「そのせいで、ボクはみこ様に逆恨みを……おおっ♥ ふっ♥ ううむっ♥ ふーっ♥ ふーっ♥」

「か、彼女は、殿方へ奉仕する術をよく知っている。そうやって芸能界を生き抜き、ご主人様にすり寄って……ボクをいたぶる役目に就いたんだ」

『み、みことくん……？ どうして、キミが……』

「……あの日は驚いたよ。道場でのリンチで気を失い……目を覚ましたら、彼女がいたんだ」

『ま、まさか……キミも、グルだったのか……？ あの時の、仕返し、かい……？』

「彼女は言ったよ。今ダンス教室やっているから、手伝ってほしい、と…… すぐに、ウソだと分かった」

「彼女が音楽学校時代に見せた、異常な嗜虐心……それを思えば、どんな目に遭うか想像できた。だけどボクは、ボクは……」

『はあーっ……はあ〜っ……』

「情けない、話だ。道場でのリンチに、心も体も限界を迎えつつあった。なにより……何度もレイプされて、男が。男が、怖くなってしまって……(泣き声)」

「同じようにいたぶられるなら、相手は女性の方がいい、と。そんな安易な考えで、ボクは……」

『わ、分かった……うッぐッ！ わ、分かりました……』

『お願いします、みこ様。どうかボクを、かわいがって、ください……』

「……分かっていなかった。男だろうと、女だろうと。抵抗する術を失った相手に、人がどれほど残虐になるか……」

##ちょっとの間

『い、いくら生徒が女性だけとは言え、こんな衣装……っ♥』

「レッスン用のレオタードは、ヒドいものだったよ。生地は薄いし、胸元もお尻も丸見えだし……でも、逆らえば道場送りだからさ」

「ダンス教室の生徒は、全員が春風音楽学校の卒業生だった。みこ様と一緒にイジメを行った、後輩たちだよ」

『そういう、ことか……随分と、手の込んだ復讐だね』

「ほ、本当のことを言うとね。ちょっと、安心したんだ。だって、相手は後輩だ。体格も、力も、道場の先輩方には及ばない」

「もちろん、抵抗することは、できないけれど……」

『ん、ふ……ッ♥ ふう、ん……ッ♥ ふうーッ……♥ ふうーッ♥』

「ストレッチの時に、みんなが寄ってきてね。体中、いやらしい手つきで、んっ、さわって……ッ♥ うっふっ♥」

「み、みんな言うんだ。ボクはいやらしいカラダをしている、と。女の子でも、その気にさせるような体つきだと……んっふっ♥」

「お、女の子の手つきは、男のそれとは、違う。優しく、じれったく、そして……意地悪、なんだ……っ♥」

『はッ、ふ……ッ♥ ふーッ、ふーッ♥ な、なにを言うんだい。お尻を、突き出してなんか……ふおっ♥』

「さわさわ、と少し触っては、離れて……ボ、ボクの方から、求めるように……ふひっ、くっ、ん、おおオ……ッ♥」

「はッ、はッ……♥ い、今も、少し、ね……っ♥ 触られた方が、あの頃を、思い出しやすい、だろうと……んくあっ♥」

「はーッ♥ はーッ♥ たっぷり、じっくり、ボクのカラダは弄ばれて……すっかり火照った後……レッスンが、始まるんだ……っ♥」

『わ、分かった……♥ それでは……んっ♥ ア、アラベスクの、姿勢から……っ♥』

「アラベスクの姿勢って、分かるかい？ 片足を上げて、体を水平にして……うん。あれだ」

「バレエでは、よくやる姿勢、でね。久しぶりだけど、上手くできたと思うよ。でも……姿勢の美しさなど、彼女たちにはどうでもよかったんだ」

『んんッ♥ こ、こらっ、なにを……っ♥ ふはっ♥ あ、あまりっ、触っては……ああっ♥』

「ストレッチの時とはまた違う、卑猥な触り方だった。ボクの性器……オマンコをなぞる、露骨な、愛撫を……おっ♥」

「や、やめるように、言っただけ……んッ♥ 誰も、聞かなかったよ。それどころか、足首を掴んで、強引に、股間を……おっほ……ッ♥」

「せ、責められて、はじめて気付いたよ。あの姿勢が、全身の性感帯を晒す、おそろしく無防備で、いやらしい姿勢だと……っ♥」

『や、やめるんだ……っ♥ む、胸を……んつくっ♥ ちっ、乳首っ♥ 乳首を触るのはッ、やめ……
ふうつくッ……♥』

「う、薄い、生地だからね……乳首が勃起しているのも、すぐにバレて……ひぐッ♥ カリカリと、爪
で、弾かれ、て……っ♥」

「いやらしいですね、先生、と……おっ♥ ボ、ボクの乳首を……ッ♥ しつこく、じっくりと……っ♥」

『おおお……ッ♥ た、頼む……そこは、おッ♥ オマンコから、指を……っ♥ ふぐッ、んおおおッ♥』

「乳首とは別に、オマンコも、責められて……ッ♥ あの姿勢では、大勢に、同時に、責められるん
だよ、防ぎようが、ないんだ……っ♥」

「ぐちっ、ぐちっ、て。わ、わざと、いやらしい音、立てながら……ま、まるで、おちんちんみたいに、
指を……」

『んふッ♥ おおおおおおおッ♥』

「た、耐えきれずに仰け反ると……よわっちい先生にお仕置き、なんて言って。お、お、お尻、お尻
の穴、まで……っ」

『ふっぐう……ッ♥ ど、どこにいれて……おほおお……ッ♥ い、今すぐやめッ、ふッ、おッ、おお
おオ……ッ♥』

「お、驚いた、よ。はじめて、指を入れられた時から、ゾクゾク、気持ち、良くて……ッ♥ ヘンタイア
ナル女だって、みんなに、笑われて……ッ♥」

「お、おそらくは……道場で、気を失っている間、そちらも……うッ、うう……ッ(泣き声)」

『おッ♥ おおおッ♥ だっ、だめッ、だめだッ、もッ……おおお♥ 頼む、もう、ムリ……いいひィ
……ッ♥』

「そ、そもそもね……アラベスクで静止するなんて、プロのバレリーナでも、数分が限界なんだよ」

「それを……先生はとっても鍛えてるから平気でしょ、なんて、ふおッ♥ か、体中、弄られながら、
なんてエ……ッ♥」

『む、ムリッ♥ もうムリだッ♥ イッ、イ、クうううう……ッ♥♥』

##がくっ、と膝をつく

『はーッ♥ はアーツ♥ う、うう…す、すまない……♥ す、すこし、休みを……むっぐッ……』

「姿勢を崩した瞬間……みんなに、手足を抑えつけられてね。おしおきだ、おしおきだ、って。そし
て、みこと様が……見覚えのあるものを、持ってきた」

『はーッ、はーッ……♥ わ、分かっていたけれど……反省など、欠片も、していない、ようだね
……』

「護身用のスタンガンさ。音楽学校時代も、彼女はこれで被害者をイジメ抜いた。前は、首だからバレた、今度はバレないように、と、お尻に……」

##バチン、と電撃の音

『んぐう……ッ！？』

「なんてことない、ちょっとした衝撃と、火傷さ。だ、だけど、ボク、道場で、弱くなっちゃった、みたいで……」

『あッ、はッ、はッ、はッ、はーッ……！ はーッ……！』

「あの程度の痛みで、心臓、バクバクして、汗が、ぶわあって。そんなボクを面白がって、また……ッ」

『ま、待て！ いあッ、や、やめてくれ……ッ！ たのむ、い、それは、もう……ッ、ぎゃあああッ』

「に、二回目は、もっと痛くて……だから、ボク、また、漏らしてさ……それ見て、電撃で潮噴いてるとか、言われて……」

『うッ、ううう……ッ、たのむ、たのむから、もう、やめてくれ……ッ、さ、触っても、いいからア……ッ』

「惨め、だったよ。あの程度の衝撃で、ボクは抵抗する気力を失ってしまった。命じられるがまま、次の、レッスンに……うっぐうッ……！」

『は～～ッ♥ は～～ッ♥ はひッ、ひへッ♥ ヘッ、ええ……ッ♥』

「次のレッスンは、乗馬さ。大体、想像が付くだろう…？ ボクが、馬になるんだよ。四つん這いになって、背中に、みこと様を、乗せて……ふっおおッ♥」

「おッ、お尻とッ、オマンコにッ、尻尾、入れられて……ッ♥ それでッ、教室中を、歩き回る、ように……」

『おッ、へッ、へひッ♥ ひッ、お、お尻ッ、が……ッ♥ ひぎいッ♥』

「も、もちろん、馬、だからね。止まったら、む、鞭をッ、いっぎッ♥ お尻、鞭打たれて、無理矢理……ッ♥」

『す、すまない……うおッ♥ ち、乳首ッ、ちぎれ……ッ♥ ふんぎッ♥ あッ、歩くッ♥ 歩くからア……ッ♥』

「みんな、乗馬を嗜んでいるから、鞭の使い方が上手くてね……ッ♥ ち、乳首だけを、器用に打ったり……んっぐッ♥」

「うッ、お～～ッ……♥ そ、そうだね……鞭打たれて勃起したマゾ乳首なんて、叩くのは、簡単……うおッ♥」

『うゝウツふツ♥ うふーっ♥ んふーッ♥ はッ、はッ、はッ、ああ……ツ♥』

「後輩たちに、野次られながら、ば、バカみたいに、教室、練り歩いて……尻尾を、力づくで、ねじ込まれたり……」

『んぐおおおツ♥ お、おお……ツ♥ め、抜けないッ、抜けないから、もう、押し込まないで、くれええ……ツ♥』

「ひ、必死で、教室を1周して、終わったかと思えば……っ、次の子が、乗ってくるんだ……ツ♥ また、ボク……ツ♥」

『はーッ♥ はーッ♥ す、少し、休憩を、おゝッ♥ やっ、やめてっ、叩か、ないでくれッ♥ 歩くッ、歩くからア……ツ♥』

「何周も、何周も、歩いてると、さ。足が、滑るんだよ。もう、汗とか、愛液で、床が、べちゃべちゃで……ツ♥」

『はひッ、はひ……ツ♥ はッ、ひィ……ツ♥ ひーッ…ひーッ…きゅ、きゅうけっ、休憩っ、を……ぜひッ、ぜひィ……ツ♥』

「どれだけ歩いて、休ませてくれないんだよ。ボクが跪いて、お仕置きが確定するまで、ずっと、ずっと……ツ♥」

『も、ゆるし……はっぐッ♥ お、おねが……おねがい、し、あああ……ツ！？』

##転倒音

『うッ、うあッ……く、は、はなして……はなしてくれエ……ツ♥ い、いやだッ、いやッ、いやッ、ぐああああ……ツ！』

「3回目は、おっぱいだ。乳房の下の方に、押し当てられて。おっぱいデカすぎて、痕がみえな～いって、ゲラゲラ、笑って……」

『あッ、ああ、あ……ツ、あッ、うああッ……』

「早く馬になれって、スタンガン突きつけられて。でも、もう、足が滑ってさ、四つん這いにも、なれなくて……」

『ご、ごめんなさい、もう、ムリだ……ほ、他の、他のことなら、なんでも……！』

「み、惨めだった……今でも、そうさ。暴力に屈して、許しを乞うなんて……そして、次は……っぎ、は……(ごくん)」

「……な、なに？ 実演……？ んんっ♥ ど、どうして、こんなところで……おおツ♥」

「ふーっ♥ ふーっ♥ う、うん。せっかくだから、この場で見せてあげよう。口で説明しても、よく分からないだろうからね」

「本当に、アレは見せないでくれるんだね？(小声)」

「な、なんでもない。つ、次にボクは、みんなの前で、自慰を……おおッ♥ がッ、ガニ股オマンコオナニーを、させられたんだ……ッ♥」

「はっ♥ はっ♥ う、うう`っぐ……ふっ、ふっ、ふ〜〜っ♥ わ、分かっている、今するから、少し……ん`んんっ♥」

「ほッ♥ ほッ♥ わ、悪いね……こんな姿、見たくも、聞きたくも、ないだろうが……少し、我慢を……おおおっ♥」

「ふーっ♥ ふーっ♥ こ、こうやって、腰を深く落として、んおっ♥ 激しく、ピストン運動をオ……ぐおっ♥」

「や、やめてくれ……っ、知っているだろう、今のボクの体は……お`お`おッ♥♥ しゅっ、しゅまないィ……っ♥」

「ふぬっ♥ んんっうッ♥ おおッ♥ 手は頭の後ろッ♥ 脇を開いてッ、デカ乳を、揺らすウ……ッ♥」

「ふぐッ♥ んんっぐッ！ んぎッ♥ ふうお`ッ、お`ッ、ぬうおお……ッ♥」

「へ〜っ♥ へ〜っ♥ み、みこと様、いつまで……んぐおッ♥」

「く、口答えなんて……ふぎッ！？ ま、待ってくれ、約束が違うッ、やめッ……」

『はッ、春風便器団ッ、豚組ッ、大河輪たまきですッ！ よ、よろしくお願いしますッ！』

「〜〜〜〜〜」

『そ、それでは、ぶ、豚組、大河輪たまきの、単独公演……た、『たまきのオマンコアクメショー』、開演、です！ んッ、おおお……ッ♥』

『ほッ♥ ほッ♥ そおれッ、ほッ、おおお`っ♥ かつ、会場の皆さんもっ、どうぞっ、お好きに、オマンコをッ、おなぶりくださッ、おああ……ッ♥』

「……は、はは。恥ずかしい、なんて気持ちか、まだ、残っているんだね……こんな姿、見せたくなくて、さ。つい、みこと様の口車に乗ってしまった」

「あの子が、ボクとの約束を守ったことなんて、一度も、無いのにな……」

『ぶッ、豚のたまきのオマンコはっ、どこを責めても潮を噴きっ、おほおほおっほとオホ声をッ、おッ、ふうおッ……♥』

「……仮面ファイター・プリンスとしてデビューした後も、そして、今も……歌劇団は、ボクの憧れだった」

「ボクだけじゃない。あの学校の卒業生なら、誰もがそうさ。その気持ちをよく分かっているから、みこと様は……」

『お`おお……ッ♥ おおおおッ♥ おおお———ッ……！』

「涙が、止まらないんだよ。あれだけ道場で痛めつけられても、泣かなかったのに」

『ぶ、豚の……豚組の、たまきは……はお`ッ♥ お、オマンコでッ、みなさんを、おッ、おうう……ッ』

「鏡張りのスタジオに、ボクの姿が……後輩に脅されて、素っ裸で、惨めにオナニーしているボクが、ずっと、ずっと、映って……ッ♥」

『もう……もう、ゆるしてくれエ…… こんな、惨め、すぎる…… とても、耐えられないィ……』

「スタンガンの方が、マシだと思った。これ以上、思い出や憧れを、陵辱される、ぐらいなら……」

「だけど、みこと様は……や、やめてほしければ……あの時助けた後輩を、ここに呼べ、と」

『あ、へ……？』

「あの事件以降、彼女はみこと様から引き離されていた。連絡先は、ボクしか知らないんだ。だから、教えろって……」

『は一ッ、は一ッ』

「ボクは、ボクは……」

『……わけ、ないだろう』

『教えるわけが、ないだろう……っ！ どこにでも、押し当てるといい……！ ボクは決して、キミの思い通りには、ならない……ッ！』

『う`ッあ……ッ！ あッ、あ`ああああ~~~~ッ！ はあ`ッ！ うっ……うお`ッ！？ うおおおおお———ッ！』

「教える、なんて選択肢はなかったよ。ヤツらに差し出せるのは、この体と心だけだ。無関係の人間を巻き込めるはずもない」

「でも、このせいで。ボクが簡単には折れないと、ヤツらは知ってしまった。だから、だからボクは、全てを……」

「あの時、守らなければ良かったのかな？ そうしたら、まだ……分からない。分からないんだ。もう、もう……ううッ、うううう……(泣き声)」

##第四章 不可逆改造 ～アクション女優、廃業 全身ポルノ化手術～

「道場から、教室へ。舞台を替えながら、ボクへのリンチは続いた」

『んお`おッ♥ ふッ、んぐっふッ♥ んんッ♥ お`ッ、おおお————ッ♥』

「その間、何度も一線を越えた要求をされたよ。無関係の人間を騙すよう命じられたり.....更なる契約へのサインを強要されたり.....」

「だが、だが、ボクは.....」

『こ、ことわるう.....ッ♥ いたぶるなら、ボクだけに、しろオ.....♥ 他の誰も、お前たちの好きには、させないィ.....ッ♥』

「毎日毎日、ボロ雑巾みたいにされながら、ギリギリのところで、踏みとどまっていた」

「そんなボクに業を煮やして.....ついに、ご主人様本人が動き出したんだ。ボクの抵抗力の源.....この、鍛えた肉体を、完全に作り変える、ために」

『う.....む.....こ、ここ、は.....』

「ある日のことだ。いつものように、失神するまで愛撫を受け続けて.....ふと気付けば、ボクは手術台に拘束されていた」

「悪趣味だろう？ プリンスの改造シーンが忠実に再現されている。鎖と手錠までそっくりだ」

『さつ、えい、か.....？ マネージャーくん？ マネージャー、くん.....？』

「原作で、リッパーの首領がいた場所.....そこには、ボクの改造手術を楽しみに待つ観客たちの姿があった」

『あなたは.....瀬川プロダクションの.....！？ まさか.....！？』

「そこでボクは、はじめてご主人様の顔を知った。そして.....すべてが、彼の策略だったことを、理解した」

「気付くのが、遅すぎたよ。思えば、デビューの頃から、ご主人様は、ボクを、仮面ファイター・プリンスを好ましく思っていなかった」

「だけど、まさか、こんなことまで.....」

「(深呼吸) そう。改造手術だ。ボクはあの手術室で、強制的な整形手術を受けさせられた」

「.....いつ、だって？ 勘のいいキミのことだ。気付いているんじゃないか？」

「そう、半年前だ。単身での海外ロケなんておかしいと、キミも怪しんでいたね」

「ボクはあの時、東南アジアの小国に拉致されていたんだ。誰の手も届かない場所で、おぞましい、改造手術を……」

『あ、あなたは常軌を逸している……こんな手術、ボクが同意するわけが……おッ、おおッ……？』

「知っての通り、ボクに拒否権なんてなかった。抵抗した瞬間、首筋になにかを打ち込まれた。視界が歪んで、意識が朦朧として……」

「ヒドい顔、してるだろ。半目のまま、よだれをダラダラ溢れさせて……そうやって、判断力を奪われた状態で、ボクは、インフォームドコンセントを受けた」

「ボクを完全に無力化する、3つの手術について。正式な名称は……シリコンバッグ式豊胸手術。肋骨除去手術。そして……ふくらはぎ神経遮断手術」

「……どれもこれも、現代の美容整形では行われないものばかりなんだよ。人体へのリスクが、あまりにも大きすぎるから……」

『豊、胸……い、やだ……これ以上、胸を、大きく、なんて……うウ……ッ』

「ボクがこの大きな胸にどれほど悩まされてきたか……キミは、知っているよね。その苦しみを知った上で、彼らは更に胸を……んッ」

「ふーっ。失礼。デカ乳をデカくしろ、と言ってきた。サイズにして120cmオーバー。周りの男全員の目を惹く、爆乳オナペットになれ、と」

「今まで作り上げてきたアクション女優としてのキャリアを全て捨て去って……男の性欲を満たすだけの、ポルノ女優になれ、と」

『ふざ、けるな……あ、あなたたちの、思い通りには、ならない……んおッ……お～～……ボ、ボクは、アクション女優、大河輪、たまきだ……』

「薬物を打ちながら、彼らは何枚も写真を見せてきた。ボクの乳房を膨らませた、悪趣味なカラージュ画像だ。そして、ボクの耳元で囁くんだ」

「今からお前はこうなる。もうコスチュームは着れなくなる。子供にも見せられない、下品なカラダになるんだ、と……」

『いや、だ……ボクは、仮面ファイターだ……そんな、ふしだらな体に……あア……』

「……下品になる、だけじゃない。胸を大きくすれば、今までのようには動けなくなる。これは、ボクを無抵抗のダッチワイフにするための手術なんだ」

『ぜ、ぜったい……んんん……ボク、は……あ、お……』

「……同意なんて、するわけないだろ。ボクが、ボクがどれほど肉体を磨き上げてきたか、キミも……！」

「でも……でもね、目を覚ました時には、ボクの署名がされた書類が用意されていた」

「ご主人様はニタニタ笑いながら言った。『アクション女優は廃業だ。スケベなカラダで男に媚びるだけの人生が始まるぞ』って……」

##かちゃかちゃ

「手術は、局部麻酔で行われた。ボクの肉体が変貌していく様子を、ボクに見せつけるために」

「人生をかけて築き上げてきた肉体を失う……その絶望を、ボクに味わわせる、ために……」

##ぴっ、ぴっ、と電子音

『しゅー……しゅー……やめろ……やめ、ろ……』

「はじめは、豊胸手術だ。一口に豊胸と言っても、たくさん方法がある。他の部分の脂肪を集めたり、ヒアルロン酸を注入したり……」

「ボクが受けさせられたのは、シリコンバック式の豊胸手術だ。肉体への負担も大きくて、今ではほとんど行われなないんだけど……」

「これが一番、おっぱいがデカくなるからさ。この乳房が下品に膨らんで、男の人が楽しめれば、それでよかったから」

##脇にメスをいれて切開。術野を広げる音。

『んっぐ……いっ、うッ、うぐうう……』

「わき腹にメスが入っていくのがよく分かった。麻酔でも異物感は消えないから」

##手術音(メスやカンシがカチャカチャ鳴るイメージ。電子音があってもいい)

『うっ、うっ……ううッ、う…… しゅーっ、しゅーっ』

「……ヒドい、医者達だったよ。術中も、折を見て胸を揉んだり、乳首を弄ったりしてね」

『やめ……ひゅーっ……おーっ……おーっ……』

「『まだ抵抗するなんて、生意気な女だ。もっとおかしくしてやろう』……なんて。よく分からない薬物も、たくさん投与された」

『んッ、お……ッ おふ～～っ…… おふ～～っ……』

「怖かったよ。胸の感覚が麻痺しているから、どんな薬物を打たれたのか、検討もつかないんだ」

「効果は……後で、教えるよ。あんまり、驚かないでくれ……」

『う、んぐううッ……！？』

「切開が終わると、シリコンバッグを挿入する。乱暴だったよ。200CCのシリコンを、切開部に強引に押し込んでいくんだ」

『んがッ、あゝああッ、あゝッ！？ ふぎッ、いゝいいいイ〜〜〜ッ』

「麻酔でも、痛みが消えなくてさ。のたうちまわるボクをみて、ご主人様達は笑っていたよ。『いい気味だ』って……」

『んゝあッ！ あッ、があッ……いッ、だ……ッ！ あッ、うああア……ッ！』

『ふッ、ううッ、ンうッ……しゅ〜 しゅ〜〜っ……』

「めいっぱい苦しめた後は、手術の邪魔だって麻酔を増やされて。はじめから、そうしてくれれば、よかったのに……」

『しゅ〜〜……しゅ〜〜……』

##手術音と呼吸音が3秒ほど

「……手術室の真っ白な光の向こうで、大勢の人が笑っているのが見えた」

「とにかく、不思議だったよ。いつの間に、あれほど多くの人を敵に回したんだろうか、と。そんなことばかり、考えた……」

##ぴーっ、と電子音

「豊胸が終わっても、手術は終わらなかった。次は……次は、ろ、肋骨の、除去だ……」

##カチャカチャ、と器具を準備する音

「どうしてそんなことをするかって？ 腰がくびれて、見た目が良くなるからだ。それ以外に、なんのメリットもない」

「ポルノ専用の女を作るための手術だ、とご主人様は仰っていた。セックスアピール以外の機能を削り取って、男に飼われる以外の生き方を選べなくなるんだ」

「……彼の言葉は、正しかった。この手術で……ボクの人生は、終わってしまった……」

##ぴっ、ぴっ、と電子音

##カチャカチャ、と器具を準備する音

『うっ、うっ……しゅーっ……しゅーっ……』

「豊胸とは、危険度のレベルが違う。だって、骨を減らすんだよ？ それも、内臓を守る、あばら骨を……」

『うーっ！ あうッ、あッ、うー——っ！ うーっ！ ううう〜〜っ……！』

「だから……最後まで、暴れた。もう手遅れなのにね。がんじがらめに拘束されて、麻酔も薬物もたっぷり打たれて。それでも……」

『ひゅーっ……うっ、ひゅ～っ……』

「せめて、眠らせてほしかったな。か、彼らは……絶妙に麻酔をコントロールして、ボクの意識を残したまま、手術を……」

##カチャカチャ

『うっ……うううーっ……ううーっ……』

「手術の間、医者達は嫌がらせのように肋骨除去のリスクを説明してきたよ。しっこく、ねちっこく」

「肋骨は内臓を守る骨だからさ。それが減ったら、お腹への衝撃は、文字通りの致命傷になる。アクションなんて、もう……」

「肺活量だって落ちるから、激しい運動ができないどころか、筋トレすら不可能になる」

「見なよ、ボクのお腹。つるつるだろ。もう、腹筋、鍛えられないんだよ。このまま、細くなっていく、だけなんだよ」

『ひゅーっ……ひゅーっ……』

「……アクション女優としてのボクは、この手術で殺されたんだ。今では、四六時中、ずっと息苦しいよ。筋肉量が減って、満足な呼吸も、ままならない」

「顔色もずっと悪いから、チークとファンデーションで誤魔化しているんだ。……まあ、それも、もうすぐ必要なくなるんだけどね」

『あっ、あうっ。うっ、ううっ、うっ』

「『女の癖に太い骨だ』って言われたよ。思い出したよ。激しい稽古でヒビが入ったりしたこともあったなって」

「その度に治して、より強く、より太く、育ってきたんだなって。そんな骨が、いま、除去されてしまった。そのとき、やっと理解した。自分が失うものの、大きさを」

##きゅるる、とドリル音

『あアーー……あアーー……』

「ボクを、“大河輪たまき”を作り上げきた骨格を、この人たちに破壊されて、いいように作り変えられるんだな、って……」

『ひゅーっ……ひゅーっ……ひゅーっ……』

「……除去された肋骨は、ご主人様の家に飾られているよ。この間、それで、オマンコを……」

「……ゴメン。聞きたくないよね。手術の話に戻るね」

##手術音

「胸をデカ乳にされて、お腹から骨を抜かれて。最後は足だ。ふくらはぎ、神経遮断手術……」

『しゅっ、ひゅーっ……ひゅうう～っ……』

「豊胸と肋骨除去に続いての施術だ。ボクの体力も限界を迎えていた。だけど、そんなことを気にする彼らじゃない」

「ボクが不規則に痙攣しようと、奇妙な呼吸音を立てようと……手術は、続行された」

##ぐちちっ、と肉を裂く音

『ひゅっ、ひゅっ……ひゅ～っ……ひゅ～っ』

「……この手術は、強引に足を細くするためのものだ。神経を切断して、筋肉を萎縮させることで、ふくらはぎを萎ませる」

「……分かる、だろ。足の筋肉が衰えてしまったら、アクションどころか、日常生活すら……」

##じゅうう～となにかが焼ける音

『ひ～っ……ひい～っ……』

##手術音

「神経を遮断されてから半年ほどでね、ボクの足、こんなになっちゃったよ。もう二度と戻らない。戻れない……」

「一度切断された神経は、二度と修復されることはないから。ボク、一生、このままだ」

『いつ、ひい～っ……ひゅっ、ひい～っ……』

##手術音

「……いずれは、足の筋力低下によって、歩くこともできなくなる」

「ご主人様の言う通り、誰かに飼われるだけの便所としてしか、生きられなくなるんだ」

##ぴー、と長めの電子音

「12時間にも及ぶ長い手術が終わった頃……ボクは泣いていたらしい。ご主人様が、そう仰っていた」

「ボクが覚えているのは.....その翌日だ。目覚めた時から、体が痛くて、そして、重くて。起き上がるのにも、時間がかかって.....」

『あ、ああ.....ああああ〜〜〜〜ッ.....』

「鏡を見て、分かった。ボクが、終わったんだ、って。不自然に張った大きすぎるおっぱい。不健康にくびれたお腹」

「ボクの知っているボクは、もういない.....ここにいるのは.....ポルノ女優、なのだと.....」

「そ、それから二週間、ボクは.....あ、ボクは.....」

「長い、リハビリを行ったんだ。キミにバレないように、最低限の日常生活が送れるように.....いいッ！」

「.....お願いします。あれだけは、あれだけは言わないで。話したくない。もう、思い出したくも.....ぎゃああああッ」

##スタンガンを押し当てられる

「は一ッ、は一ッ！ いやだッ！ この約束だけは、守ってくれよッ！ ボクは...うっぎゃッ！ うあゝあああ.....ッ！」

「きッ、聞くなッ、マネージャーくん！ もう通話を.....おあッ！ ぐっひッ♥ いゝああああー——ッ」

##第五章 人間引退公演 ～未来を賭けた最終決戦(笑)～

「ひゅーッ.....ひゅーッ.....」

「話し、ます.....話しますから、もう、お許しを.....」

「はあっ..... はあっ.....み、みっともない姿を、見せたね.....すまない.....」

「懲りもせずに、また、刃向かってしまったよ.....おかしいね.....もう全部、諦めたはずなのに.....」

「キミの声を聞くと.....昔に戻れた気がするから.....まだ強かった頃のボクが、ここにいるような、気が.....んんっ♥」

「.....すまない。ご主人様が昂ぶっておられる。少し待ってくれ」

(キス音5秒)

「……ぷはっ。かしこまりました。それでは、お手でご奉仕いたしますね」

「ありがとう。ご主人様に褒められたよ。最近、ずっと元気がなくて、いたぶっても面白くなかったって……キミのおかげだね」

「でも……流石にもう、ムリだ。抵抗できないよ。あの日のこと、思い出したから……」

「ボクが、全部失った日……大河輪たまき、人間引退公演の、ことを……」

『は一つ……♥ は一つ……♥』

「引退公演はね、手術が終わった翌日に開かれたんだ。ほんの少しのリハビリもさせてもらえずに、ボクは病室から連れ出された」

「渡された衣装は、ヒドかったよ。性器と乳首だけを隠すような卑猥なビキニ。でも、もっとヒドいの……ボクの、カラダさ」

「こんなカラダの女、誰もファイターだと思って思わないよ。ボク自身ですら、もう……」

『……あうっ。いく。行くから、叩かないでくれ……んぐッ♥』

「引退公演の舞台は、リップパーの基地そっくりに作られていた。ほら、プリンスの第一話で、クモ男と戦った、ボクたちの、はじまりの場所だ」

『こ、こんなところで、なにを……ひゅーっ…ごほっ…！ まだ、ボクをいたぶるつもり、なのか……』

「命じられたのは、AV。アダルトビデオの、撮影だった……」

「そして、撮影前に、ご主人様自身がボクを犯す、と。自らの手で強姦して、味わい尽くす、と」

『う、うう、う……』

「……本当のこと、言うよね。ボク、抵抗する気力、なかったんだ。こんな体にされて、さ。もう、なにしても意味ないって……」

「抵抗したって、どうせ、力づくで言うことを聞かされると。そんな風に、諦めてしまっ……」

『……分かり、ました。せ、せめて……彼には、マネージャーくんには、見せないで、ください……』

「……そんな、ちっぽけな願いすら、許されなかった。これは、見せしめだからさ。『仮面ファイター』という男の聖域に踏み込んだ女の、公開処刑なんだ」

『どうして、そんな……』

「芸能界の女は、ヘラヘラ笑って男に媚びを売って、言われるがままに体を差し出す。それを拒む女は、こうなると」

『……………っ』

「ようやく理解した。ご主人様がなぜ、これほどの力を注ぎ、ボクを破滅させようとしているのか」

「彼が奪おうとしているのは、ボクの未来じゃない。すべての女の子の、未来なんだ。彼女たちが仮面ファイターに憧れる権利そのものを、奪おうとしているんだ」

##ちょっと間

「ボクは、バカだね。自分の体も心も、全部諦められるのに……それだけは、諦めきれなかった」

『……か、仮面ファイター・プリンスは……正義と、希望、そして……そして……！』

『すべての子供たちの、未来のため、戦い続ける孤高のヒーローで、ある……』

『彼らの笑顔のため、仮面ファイター・プリンスは……今日も。今日も戦い、続けるのさ……！』

「たとえ最後には負けてしまうとしても……力尽きるまで戦い抜けば、誰かが。そんな姿に勇気づけられるはずだ」

「だから。だから……」

『ボクは……あなたに、負けるわけにはいかない……たとえ、この命が尽きようと……(深呼吸) 変・身！』

『はっ、はああ～～～～っ』

##乳ビンタ

『あっぎゃあああッ♥♥』

「思い上がって、いたんだよ。ボクはもうファイターじゃなかった。ただの……ただの、ポルノ女優、だったんだ」

『うぎゃッ、ひッ……♥ いッ、いいイ～～～ッ……！？ お、おおおう……ッ』

「一発だった。ご主人様に、おっぱいを叩かただけで、それだけで、凄まじい激痛が……あうッ♥ん、ご主人様、分かっています……ッ♥」

「ふーっ♥ ふーっ♥ おっぱいに、拳がめり込んだ時……ふッ♥ ボクのおっぱいは、ドクドクと疼いた……き、気持ち良くなっていたんだ……」

『はッ、はッ、はーッ♥ はーッ♥ あ、あふああア……ッ♥』

「大きくするだけの、改造ではなかった。丹念に薬物を塗り込んで、ボクのおっぱいを、マゾ乳にするための……んっぎいいいッ♥」

「おっ、ほッ♥ ほふッ、ふーッ♥ ご、ごめん。ご主人様に、デカ乳を、握り潰されて、ね。あ、あの日を思い出して、興奮しておられるようで……ふぐおッ♥」

『ふっぎッ♥ いっだ……あぁッ♥ 踏まないで、くれエッ♥ おっぱいがッ、あぁッ♥ 潰れッ、ふぎゅうううッ♥♥』

##射乳音

「おッ、ほッ……♥ ボ、ボクのおっぱいは……叩き潰されて乳を噴く、サンドバッグ乳袋に、作り変えられたんだ……」

『おっ、おおっ♥ ま、まだ……ッ♥ まだ、やりえるっ♥ ボクは……ッ、んぬおおお……ッ！』

「頑張ったよ。大きなおっぱいを腕で抱えて、なんとか立ち上がって。でも、卑猥に改造されたのは、そこだけじゃ、ない……」

『うぎiiiiiii———ッ♥』

「お尻は、蹴られたら潮を噴くように……ッ♥ ちょっとした刺激でも、オマンコが濡れるように……♥」

『はへッ、ひへえッ♥ はッ、はッ……♥ うんぎッ♥ ひぎッ♥ ふっぎiiiiiiッ♥』

「な、何度もお尻、叩かれて……ッ♥ その度に、お腹の中、ズグズグ響いてッ……♥ ヒドい顔で、喚いて……ッ♥ また、ひっくり返って……ッ♥」

『うッ、ううッ、うぐッふううう〜〜〜ッ♥ ボクは、ボクはア……ッ♥』

「諦め、きれなかったよ……♥ 倒れる度に、子供達の顔、思い浮かんでさ……っ、わたしもファイターになるって、言ってくれた、女の子とか……っ♥」

「たまきさんの姿に、勇気をもらいましたって、言ってくれた、ファンの方とか……なにより……」

「キミの顔が、キミの声が……ッ♥ ボクを信じてくれた、キミを、裏切ることが、できなくて……ッ！」

『までや……まだまでやあ……っ♥ ぼ、ボクはっ、かめっ、ふぁいらあっ、ぶおおおッ♥♥』

「でも、でも……自分でも、信じられないぐらい、弱かった。腕は上がらないし、足はずっと震えているし……」

「もう勝てないって、本当は分かった。でも、諦められないから……ボク、立ち上がっては、やられて……それ、繰り返して……」

『ひぎゃあッ♥ ふっぎゃッ♥ ふひッ♥ ひいいインッ♥♥』

「はやく立てって、お尻、叩かれて。それでも、お汁噴いて、イクだけだから。しょうがないから、部下の人に抱えられて、立たされて」

『ひへッ……ひへえッ……♥ あ……っ♥ あーっ、あーっ……ま、待って、ちょっと、待っ、あっ
ぎゃああッ♥』

「そ、それから、それから……ッ」

「立たされては、おっぱい叩かれて、お乳嘔いて。また倒れて……お尻叩かれて、イって……」

「ずっと、ずっと……何度イっても、髪の毛掴んで、立たされて。ファイターなら戦えって。勝ってみ
ろって」

『うわッ、うわあああッ♥ あッ、やああっ。やあっ、やあああッ♥』

「柔道。空手。カポエラ。色んな武術のたくさんの技。出そうとして、できなくて。こんな。こんなカラ
ダで使える技、ひとつもないから」

『うッ、う〜ッ、ううう〜〜』

「ご主人様に、抱きついてるようにしか、見えないかな。あれ、タックルのつもりなんだよ」

「おっぱいユサユサ揺らして、アクメ汁塗れのカラダ擦りつけて、それでも戦ってるつもりなんだ」

『うあッ、あゝああッ♥ ヘッ、へ……ッ、へんしんッ……！ へんしんへんしんへんしんッ！ へん
しんッ！ かめッ、うおッ♥』

「もう、戦う術、ないからさ。奇跡が起こって、本当に変身できないかって。そんな妄想に縋るしか
なかった。それ以外……勝ち目なんて、なくて……」

『おゝあッ♥ ふんぎッ♥ ぎひゅッ……♥ ひゅっ、ひゅお……ッ♥ おッ、おゝお……ッ♥』

「さんざん、力の差を、思い知らされて……んッ♥ ご、ご主人様……くうん♥ は一つ、は一つ……
す、すまない、マネージャー、くん……」

「ご主人様は、ボクが痛めつけられて、のたうちまわる姿が大好きで……少し、昂ぶっておられる
よう、だ……っ♥ おッ、おお……ッ♥」

『ひゅ〜ッ……♥ うッ……ひゅ〜ッ……♥』

「そうだ。ご主人様は、ボクが戦い続けることを望まれていた。ボクの敗北を認めてくれなかった
んだ」

「仮面ファイター様が、悪に屈するわけないよなあ……そう言いながら、ボクを立たせて、また戦
わせようとした。だから、ボクは……」

『げほッ、おゝおッ……♥ ぼ、ボク……ボクは……あッ、あッ、あああ〜〜〜ッ……！』

『ボクは、ファイターじゃ、ありませんッ！ た、ただの、女……ッ、おおッ……！ オマンコで
すウーーーーッ！』

『ず、すみませんッ、すみませんでしたア……ッ！ ボクがッ、ボクがッ、間違っていましたアッ……♥』

『おッ、女の分際で、ファイターになってしまって申し訳ありませんッ！ 女の分際で、夢を持ってしまって、申し訳ありませんッ！』

『ボクはッ、マンコするしか能の無い豚ですッ！ 豚組ッ、大河輪たまきですッ♥ どうか、どうかッ、お許くださいイ……！』

「……ゴメンね。キミと、一緒に見た夢も、今までの努力も、全部、全部……(泣き声)」

「キミがボクをヒーローだと言ってくれた、あの日から、ずっと……お`おおおッ♥♥」

##レイプ開始

「かッ、はッ……♥ はふッ、いイひッ♥ ふお`ッ♥ おお`ッ♥ 」

「おッ、ごっ、ご主人、様が……うおおッ♥ こ、興奮、されているんだ……ッ♥ ボクの、便器宣言が、一番、クると……おおおッ♥♥」

「ヘッ、へおッ、おおおッ♥ ムリッ、ですッ♥ これではッ、しゃべれッ、ふうおおお……ッ♥」

「はッ、はふッ♥ す、すまないッ、すまないイッ♥♥ 最後まで、ボク、便器でッ♥ 使われてッ、ヘッ、かふウッ♥」

「いッ、今ッ、いまはッ、お腹ッ♥ ペラペラのお腹、がっちり掴まれてッ♥ 腰ッ、叩きつけられッ、へええッ♥♥」

「もッ、もうッ、腹筋、ないからッ♥ 女のッ、おなかだからッ♥ そこ掴んでッ、んっっぎいいいいい……ッ♥」

「じッ、自分で、腰も、振れないんだよオ……ッ♥ もう、足が、全然、使えなくて……」

「こうやって、使ってもらうしか、無いんだア♥ だから、便器なんだよお♥ もう、売春婦ですら、なッ、あああッ♥」

『うお`ッ♥ お`おおうッ♥ こほッ♥ ほッ♥ あ`ッ、お`おおッ♥』

「ボクはッ、ボクはッ、間違えたんだ……ッ♥ 女の分際を弁えずに、分不相応な夢を持ってしまったッ……♥」

『……ん`あ`ッ♥ かあ`あア……はあ`ッ♥♥』

「誰でも夢を叶えられる、なんて……ッ、そんな、ウソを……ッ♥ お`ッ、お`おおお——ッ♥」

##ピストン音

『お`ッ、あッ♥ ああッ♥ あっはッ♥ かはッ♥ おお`あッ♥』

「マ、マネージャーくんッ♥ きいてくれッ♥ マネージャーくんんんッ♥♥」

「もっ、もしもっ♥ ボクのように、間違っただ夢を追いかけた女の子がいたらッ♥ お`ッ♥うお`おッ♥」

「き、キミが、止めるんだッ♥ 教えてやるんだッ♥ おッ、女はッ、ファイターになどッ、なれないッ♥
戦っても、勝てないィィ♥♥」

「殿方にッ、媚びを売るんだッ♥ 決してカラダなど鍛えるなッ♥ どうせ、どうせ、勝てないからア
.....ッ♥」

「せめてっ、優しく抱いて、もらえるように.....ッ♥ ボクみたいにッ、痛めつけられ、ないように
.....ッ♥」

「見ろッ、マネージャーくんッ♥ みろッ♥ みろおおおッ♥」

「これがッ、身の程知らずのバカマンコの末路だッ♥ 権力者に逆らった愚か者は、こうなるんだッ
♥」

「そして、キミも.....ッ♥ もう二度と、女に、夢を、持たせないように.....ッ♥ ボクみたいに、勘違
い、させないように.....ッ♥」

「頼むッ、頼むよおおオ.....ッ♥ もう、もう、誰も.....ボクのような目に、遭わせないでくれえええ
.....ッ♥」

「うッ、ぐッ♥ うッ、ふッ、お`ッ♥ ふおッ♥ おおおお~~~~ッ.....♥♥」

##潮噴き

##特典音声 たまきちゃんに聞いた！ 撮影後、フリートーク！

「(深呼吸) 撮影、お疲れさまでした～～！」

##クラッカー

「皆さん、ありがとうございます。マネージャーさんも、ご協力ありがとうございました。時々、凄く
真に迫ったお芝居で、私もとっても演じやすかったです～～！」

##拍手

「あはは！ そうですよ！ 真に迫った.....ていうか、全部信じてたんですよ。本当にごめん
なさい」

「でも、なにも知らない方がいい反応してくれるって、監督が仰っていて.....こういう形になっちゃ
いました」

「演じている時から思ってたんですけど、これ、本当にエッチで、こう……男の人が興奮するのも分かるな～～っていうか」

「私の前職……特撮女優っていう過去が完璧なスパイスになってて、そこからの転落劇にドキドキが止まらなくて(笑)」

「ただの趣味で受けた整形とか、音楽学校時代のちょっとした口げんかとか、すごく上手に脚本に取り入れてくださって、もう鳥肌です！」

「特に、最後。会長さん役の方にボコボコにされて犯されるところとか、もう悲しくて悲しくてマジ泣きしちゃいましたよ～～」

「もちろん、今までのお話は全部フィクションですよ？ こんな半分犯罪……あ、全部犯罪ですから！ あははははは！」

「女の子の夢が、とかも、今の時代絶対NGですから！ こんなマジあり得ないですって～～」

「そうそう。道場の方も、本編ではヒドいけど、裏じゃ優しくて。なんならみことちゃんとかは、私を叩くのには凄い抵抗があって」

「それでも、カメラが回ったらしっかり演じてくださって、皆さん、本当にプロなんだなって感動しちゃいました！」

「皆さんに追いつけるように、これからもAV業界で頑張っていきます！ これからも、よろしくお願いしまーす！」

##拍手

「はい、それは解散……あっぐ。あ、そ、そうですね！ 打ち上げと……は、反省会、開かなきゃ、ですね！」

「それじゃ、それじゃ……さよなら、マネージャーくん。今まで楽しかったよ。元気でね。そして……」

「……約束、絶対に、守ってくれよ」